

## 第634回

# 九州朝日放送番組審議会議事録

—— 2021年6月度 ——

◇ 開催日

2021年6月21日(月)

◇ 議題

<テレビ番組>

テレメンタリー2021

「ふつうの家族～岐路に立つ 特別養子縁組～」

放送日時：4月27日(火) 深夜2時00分から放送

今回は「新型コロナウイルス」感染防止（三密回避）の観点から、十分にソーシャル・ディスタンスを確保するため通常より広い会議室にて開催した。

九州朝日放送株式会社

## 第634回 番組審議会議事録

1. 開催年月日 2021年6月21日(月)午後3時25分～4時45分

2. 開催場所 九州朝日放送 本社7階A会議室

政府は、10都道府県に発令中の緊急事態宣言について、沖縄を除く9都道府県は20日の期限をもって解除すると決定した。しかし、感染拡大が完全に抑えられている状況ではないため、東京、大阪、福岡、北海道、京都、兵庫、愛知の7都道府県は7月11日を期限にまん延防止等重点措置に移行した。これに伴い、今回の番組審議会は「新型コロナウイルス」感染防止（三密回避）の観点から、十分にソーシャル・ディスタンスを確保するため通常より広い会議室にて開催した。

### 3. 委員の出席

委員総数 8名

出席委員数 6名

副委員長	赤木由美
委員	藤村まこと
委員	丸石伸一
委員	石井靖子
委員	守田有理子
委員	石橋和幸

欠席委員数 2名（レポート代読）

### 放送事業者側出席者名

代表取締役社長	和氣靖
常務取締役	笹栗哲朗
総合編成局長兼ラジオ局長	坂井剛
報道情報局長	柴田高宏
報道情報局 報道情報センター長	川崎浩司
報道情報局 報道情報センター プロデューサー	吉住啓一
報道情報局 報道情報センター ディレクター	森由布子
番組審議会事務局長兼視聴者・広報室長	石橋聡
番組審議会事務局（視聴者・広報室）	松永俊郎

#### 4. 議 題

(1) テレビ番組

テレメンタリー2021「ふつうの家族～岐路に立つ 特別養子縁組～」

放送日時：4月27日(火)深夜2時00分から放送

(2) 6月・7月 ラジオ・テレビ番組編成状況の報告

(3) 5月 視聴者・聴取者応答状況の報告

(4) その他

#### 5. 議事の概要

委員の意見（概要）

委員からは、

- 養子として育った男性（みそぎさん）と養子を育てる家族（石田さん夫婦）の様子から、特別養子縁組制度の現状や課題、メリット・デメリットをコンパクトにまとめた素晴らしい番組だった。一方は親の目線、もう一方は子どもの目線と、それぞれの目線から伝えていた点もよかった。
- 電話ボックスに置き去りにされ、特別養子縁組制度で育てられたものの、出自が分からずに苦悩するみそぎさんと、小さな子どもに出自を伝えて育てていこうとしている前向きな石田さん夫婦の姿が丁寧に描かれており、深く考えさせられる内容も多い、価値ある番組だった。
- 制度を利用して子どもを迎えた石田さん夫婦と、養子として育てられたみそぎさんの物語を組み合わせた構成は、両者のエピソードが対照的で「明暗」を感じさせ、非常に効果的な対比になっていた。
- 子どもの出自を知る権利は重要としながらも、情報の一括管理は行わないという厚生労働省の見解は無責任で、そうした制度への問題が提起されていたと思う。養子縁組制度の今後のあり方や出自の開示、知る権利について視聴者に考えさせる番組だった。
- 養子であることを「伝える」か「伝えない」か、どちらが正解という単純な話ではない。否定も肯定もせず、ありのままを伝え、社会に問題提起をする点においても意義ある番組だった。
- 若い女性の予期せぬ妊娠や、子どもを授かれずにいる夫婦、子育て中の家族の貧困や児童虐待など、今回のテーマの背景には複数の社会問題が存在している。家族の形が変わりゆく時代に、特別養子縁組に限らず、子どもと家族の問題を放送局が問題提起することには意義があると思った。

などの評価を頂きました。

また、気になる点や望むこととして、

- 特別養子縁組制度について、「ふつうの家族」になってしまうからこそ、国の支援が希薄になることなどを、もう少し詳しく伝えて欲しかった。他の制度との違いも紹介して欲しかった。

- 副題で「岐路に立つ」とあるが、何が岐路に立っているのか、どこが岐路なのかよく理解できなかった。
- みそぎさんの実親の事情や思いも示すべきだったのではないか。問題にかかわる全ての当事者の考えや思いを伝えなければ、一方的な視点になるのではないか。
- みそぎさんの後ろ姿と遺棄された電話ボックスが交互に映し出される場面は、ややセンセーショナルな印象を抱いた。
- 特別養子縁組制度は、国などの公的なサポートが乏しいことに問題がある。構造的な問題に対し当事者による提言などがあると、もっと問題を取り上げた意義が増すと思った。
- 重要なテーマを扱ったドキュメンタリー番組だけに、平日の深夜2時からという放送時間が惜しまれた。

などの批評や提言を頂きました。

これらに対して、担当者からは、

- 養子を育てる石田さん夫婦の様子は2年前から取材を開始した。背景には、特別養子縁組制度の対象年齢を引き上げる法改正のタイミングがあり、企画化して取材を始めた。みそぎさんは、現在、厚生労働省に当事者の意見を伝えるなどしており、そうした部分も継続して取材を行いたいと考えている。
- 副題で「岐路に立つ」との言葉を選んだ理由について、制度の開始から30年が経過する中、当事者が問題を発信し始めている。当事者の思いをどう制度に組み込んでいくか、いま岐路にあるとの意味で、「岐路に立つ」という言葉を選んだ。
- 少し聞きにくい質問は、何度も同じ質問を繰り返し、場所を変えるなどして、もう一度話を聞きなおす工夫をした。地道な取材を継続するうちに、深い部分についての思いや問題点についても言及を得られるようになった。
- みそぎさんの後ろ姿と電話ボックスの場面が「センセーショナルな印象を抱いた」とのご指摘について、決して重い印象を与える目的ではなかった。一番のテーマはルーツを知る権利だが、みそぎさんのルーツを表す上で電話ボックスの映像は外せない（象徴）と考えた。
- 特別養子縁組制度を描くドキュメンタリーは多々あるが、当事者は「感動的に描かれ過ぎていて」と捉えている。当事者はどこまでも複雑な思いを抱えており、ハッピーエンドだけでは番組を終わらせられないと考えた。
- 良質な番組をより多くの視聴者に見てもらえるよう工夫、検討を進めたい。告知の必要性も再認識した。

などの説明をしました。